

701

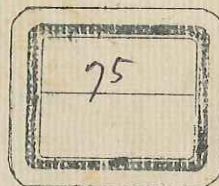
KOKUYO

NOTE BOOK

CONTAINING BEST RULED FOOLSCAP

敬
愛
公
館
第
二
十
四
回
入
選
作
品

ことば の



研究

6.1

豊田 恵美子



もくじ もくじ もくじ
 目次
 じくも じくも じくも

101

1. 研究動機 ----- P 1
2. 参考にした本 ----- P 2
3. 協力してくださった方々 ----- P 2
- 調査1
 4. 日本語の起源 ----- P 3
 - 日本人のはじめ ----- P 3
 - アイヌ ----- P 4
 - アイヌ語の構造 ----- P 6
 - やよい式文化のはじまり P 6
 - 日本語の成立 ----- P 7
5. 調査1でわかったこと ----- P 8
6. 調査1のまとめ ----- P 8
- 調査2
 7. ことはの働き ----- P 10
 - 音声器官の構造とその働き P 11

研究動機

私たちが日常生活にかかせないことはかじうしてあったのか、日本の国のことはのおこりと、そのことははどんな働きをするのかことはの働きなどを調べて見たいと思いました。それから、私たちの組に転校してきた友だちが時々ちかうことはをつかうことがあります。それを聞いて、方言のことにしても調べてみようと思いました。

8. ことははおたかいの心を通い
あうもの-----P17

9. 話しことはのとくちょう
8. 調査2のまとめ } 表 P19
書きことはのとくちょう

調査3
8. 現代かなづかいのきまり-P21

102

調査4
9. 日本の東と西のことはのちがい-P27

方言区画の東部と西部-P27

調査5
10. 東北地方の方言-----P30

103 調査6
11. 山形県の方 言-----P35

山形県各地の方 言の比 かく-P47

12. 調査6をして感じたこと-P54

13. この研究をしての反省と
自分の考え-----P55

14. この研究をして
気づいたこと-----P57

参考にした本

・山形県方言集

・ほか 方言につい

ての本 1 冊

・日本語のおこ

りについて書い

てある本 2 冊

お世話になった人

・県立図書館の人

・図書館の

向田先生

・おかあさん

調査 II

日本のことは、いつごろからできたか 日本語のおこりを調べてみた

日本語の起源

日本語はいつ、何時からこの日本の国で話されるようになったのだろう。また、日本のどこで初めて話されたのだろう。日本語は、どんな人間によって初めて島の島で話されたのか。こうした日本語の起源、成立の問題は当然日本人の起源の問題とも結びつく。日本人はどのようにして成立したのか。また、日本文化はどのようにして発展してきたか。それなども日本語の問題に関連した決して切りはなすことのできない問題である。日本人の成立かわかれればそれにともなうて日本語の成立かわかるかもしれない。また、ことは文化とともに発展していくものだから、文化の問題も考え合わせなければならぬ。

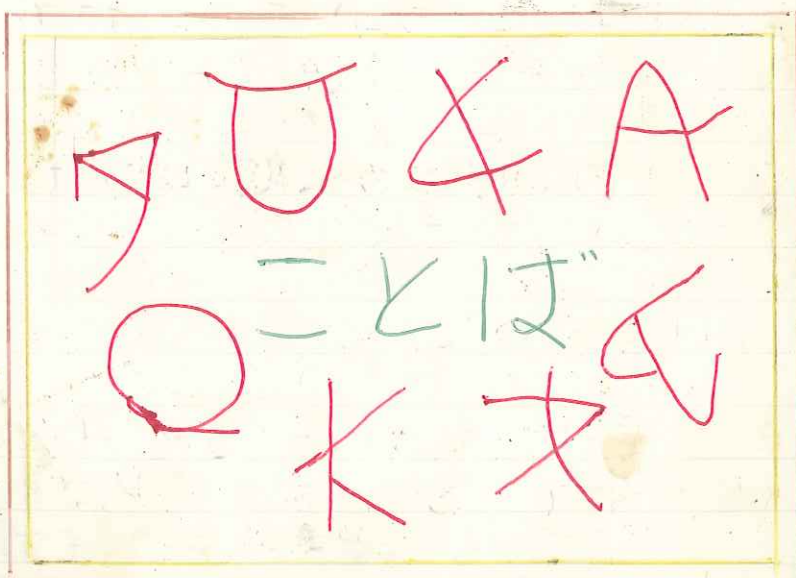
日本人のはじめ

昭和24年に群馬県のかさかけ村 岩宿で、道はたのかけになった赤土の層の中から人間の作った石器が発見された。一番古いと思われる土器が、けだれも予想しない場所から発見された。それは今から1万年以

止も前の古い時代にヒトが作った石器が見つかった。このヒトはかんたんな石器だけしか作らず、土器を作らなかった。この時代の文化は、無土器文化の時代とよばれている。

無土器文化の時代とその次のじょう文式文化の時代との間にヒトが引きつづいて住んでいたのか、無土器文化のヒトは一度たえ、あらたにじょう文式文化のヒトが日本にやってきたのか、その点はまだ明らかになっていない。それで無土器時代のヒトのけいとうは、まだはきりわからないと同時に、当時のヒトが話していたことはほとんどなものであったか、残念ながら、今のところ争がかりがない。これはの問題が考えられるのは、もっとくだった時代になってからのことである。

アイヌ
明治時代にこんな説が行なわれた。日本には先住民としてアイヌが住んでいた。それをあとから渡



ってきた民族が追いはらって、日本の国を作ったのだ。」と。もしこれが正しいければ、アイヌと日本人との関係や、アイヌ語と日本語との関係もでてくると思う。もしかすると、アイヌ語と日本語とは同じけいとうのことばかも知れない。また、アイヌ語と朝鮮語との問題にもかなりるいじする点がある。

日本語と朝鮮語とのきよりは4700年である見こみがあり、アイヌ語と日本語とのきよりはさらに遠く、同系であるとしても、7000年から10000年である。

だが、最近では、アイヌは本州に住んでいなかったという説が主張されている。それは、1. じょう文式時代の人骨が現代アイヌとにっていないということ、2. アイヌ系の人間だと思われていた平泉中そんじの藤原清ひらたちのミイラが日本人的であるという結論になったからである。

福島県から発見された人骨は、じょう文時代の末期のかめかおか式土器といっしょに出てきたがそれにはアイヌ的な形質は見られず、そのうえ、東北から発見される古代人骨には、すべてアイヌ的な印象がないということである。これは、古代人骨を深く研究されている鈴木尚博士の説である。

アイヌは、農業を持った日本民族に(たむにあっばくされた)民族である

ることはたいかである。

アイヌ語の講造

現代の日本語と同じところは、母音が a, i, u, e, o の5つである。

助詞の用法など、語順はたいに日本語と同じである。

大昔は、東と西にちがった文化があった。(やよい式文化のはじめ) やよい式時代前期の終わりになって土器表面におりけいじょう文のもようのついた土器が現われている。

やよい式文化のはじまり

じょう文式時代の後にやよい式時代がくる。はじめていねを作り、はたおりを持ち、金属品を使い、巨大な石をおいたばかりに人をほおむり、かめのかんに死人をいれてうめるなど、じょう文式時代とはまったく異なる文化の時代を作り出した。それはもっとも早く北九州に栄え、やがて近き地方に発展したという。その文化は南朝鮮から入った。それこそはのちからたいかめよう文すれは日本語と朝鮮語との間には、そうした文化に関する言語ににているものが少なくない。

やよい式時代の文化はにている
南朝鮮の文化はにている

日本語の成立

日本には、じょう文式時代に、ポリネシア語族のような音いん祖識(漢字の音とその音のひびきの組み合わせ)を持った南方系の言語が、行なわれていた。

やよい式文化の伝来とともに、アルタイ語的な文法体系と母音調和とを持った朝鮮南部の言語が行なわれるようになり、それは北九州から南へ東へと広まり、やがてそれはやよい式文化の東方への拡大にともなう、九州、四国、本州に奈良時代の言語に見られるものになった。原始日本語が成立したであろうと思われる。日本語が今日のような文法体系を持って活用されるようになったのは、今から2300年ほど前からである。それは、九州の北部から始まり、そして南へ東へと広まってきた。そしてそれは、はたおり、いな作、青銅器、鉄器という当時の最先たんの文化が日本に広まり始めた時であった。日本語は、そうして文化とともに新しい日本を成立させて行ったものと考えられるものである。

文化への入口に文字があり、文字があって歴史がある。そして文字は絵から発達し、文学になるまえに記

号というかていかあった。

調査1でわかったこと、

- ・日本語の起源、成立の問題は日本人の起源の問題とも結びつくことがわかった。

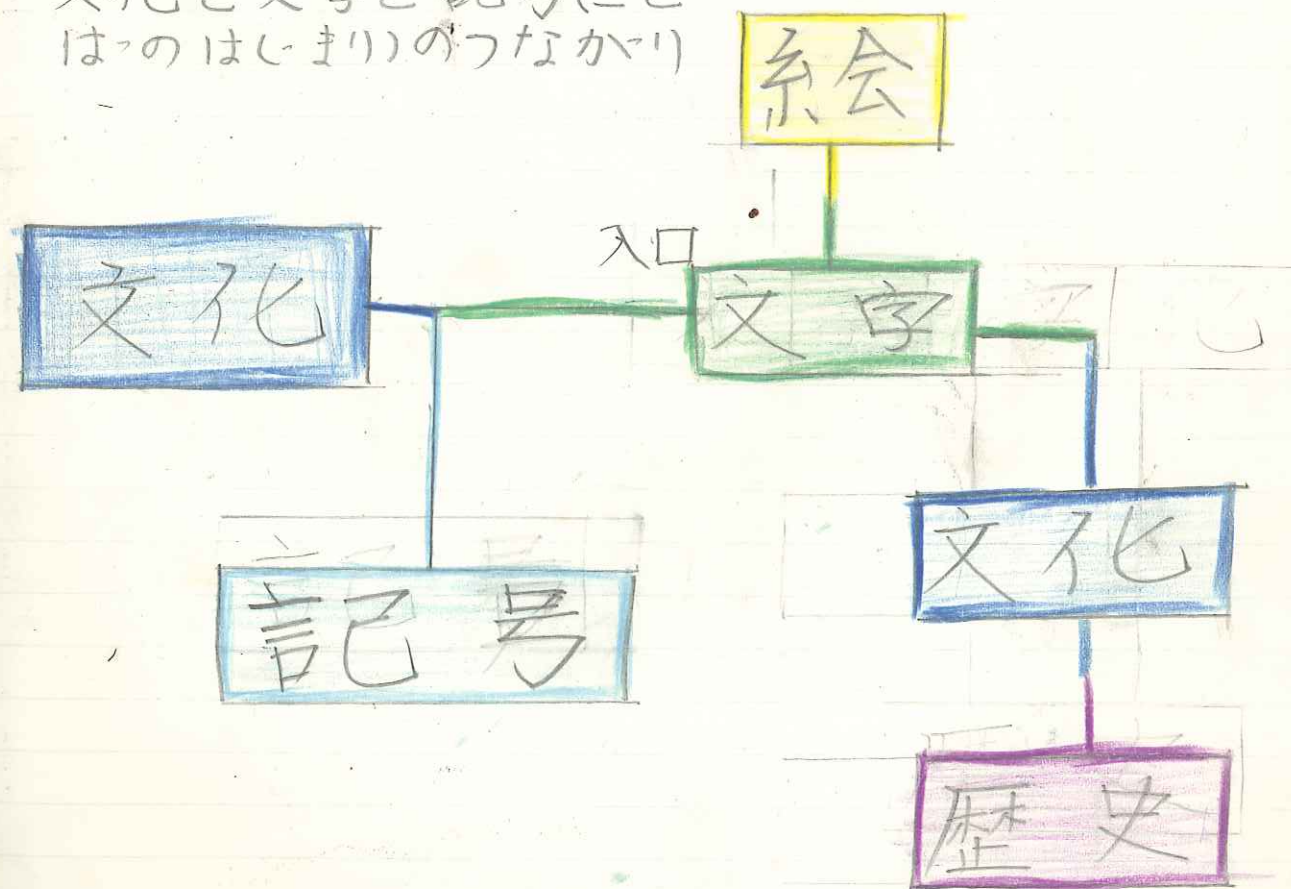
調査IIのまとめ

- ・日本語が今日のような文法体系を持って活用されるようになったのは、今から2300年ほど前からで、九州の北部から始まり、そして、南へ東へと広まっていった。

・日本語は、はたおり、いな作

青銅器、鉄器という当時の最先たんの文化とともに日本に広まり、新しい日本を成立させていったものと考えられる。

文化と文字と記号にとはのはじまりのつながり



調査②

わたしたちがふつう日常生活に
使っていることはどんな働き
をしているのか調べてみた。

ことばの働き

ことばは、話すことは、聞
くことは、書くことは、読む
ことばの4つに分かれる。

それをくわしく観察すると、
もう一つ話し合うことばがある。
ことばによる 通じ合いにあ
い、という場合においても、
おたがいに相手の立場をに
んきしなくてはその通じ合い
は成立しない

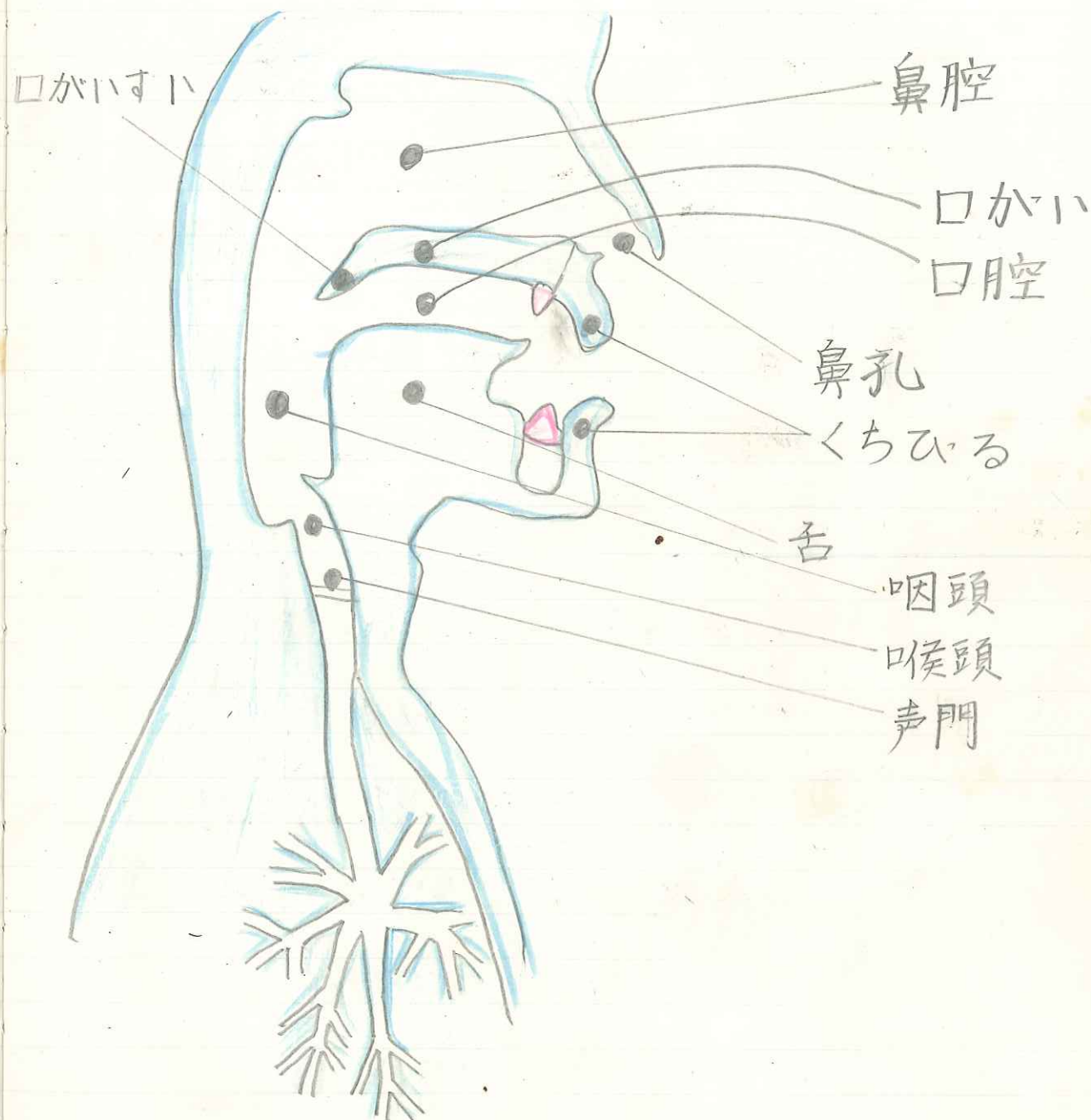
音声器官の構造とその働き

人間(私たち)が音声を発す
るために用いているのは、の
ど、鼻などはいずれもこきゅう
や食物せつ取という重要な
機能をいとなむ器官の一部
であって元来通信の目的の
ために発達した器官では
ないが、言語の差はあれ、
これらの器官によつて出
えるいろいろの音をこうみよ
うに組み合わせ、通信の
体系を作り上げ、また訓練
によつてこれを自由につか
うことが出来るようになった。

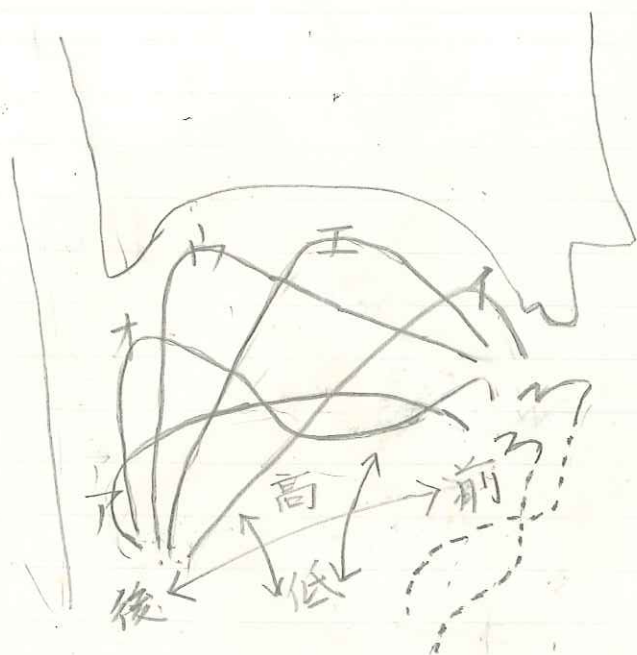
た。

だいたいの音声言語は、はいからはき出す息(二気)を利用して音声を発する。この場合、二気は、はいから気管支気管を通り、喉頭、咽頭を経て多くの場合、口こうを通して口から。またある場合は、鼻腔を通して鼻孔から体外に出されるものである。下あご、舌、くちひる、なん口かい等を動かすことによって声道の形を変え、いろいろの音をだすことができる。

音声器管図



母音の調音と舌の位置



調音点

①両くちみろ ③歯ぐき

②いん歯・歯間 ④歯ぐき口がい

⑤こう口がい ⑥なん口がい

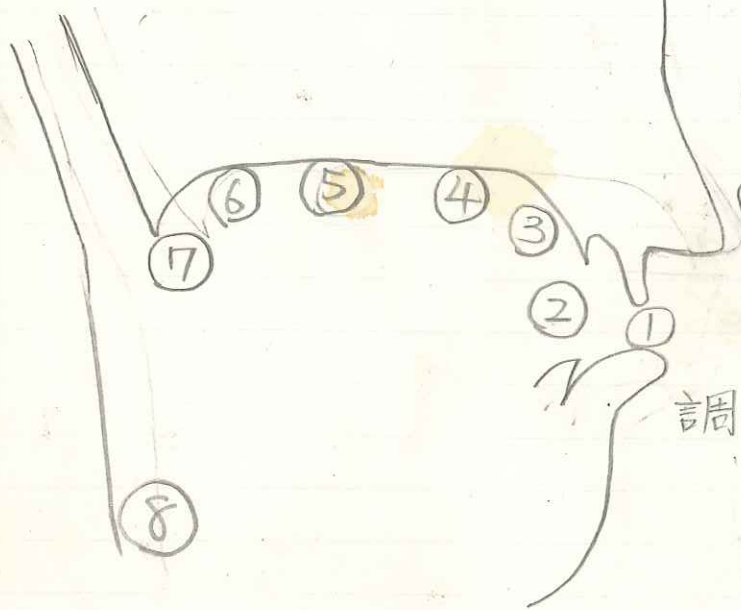
⑦口がいすい ⑧咽頭

調音様式

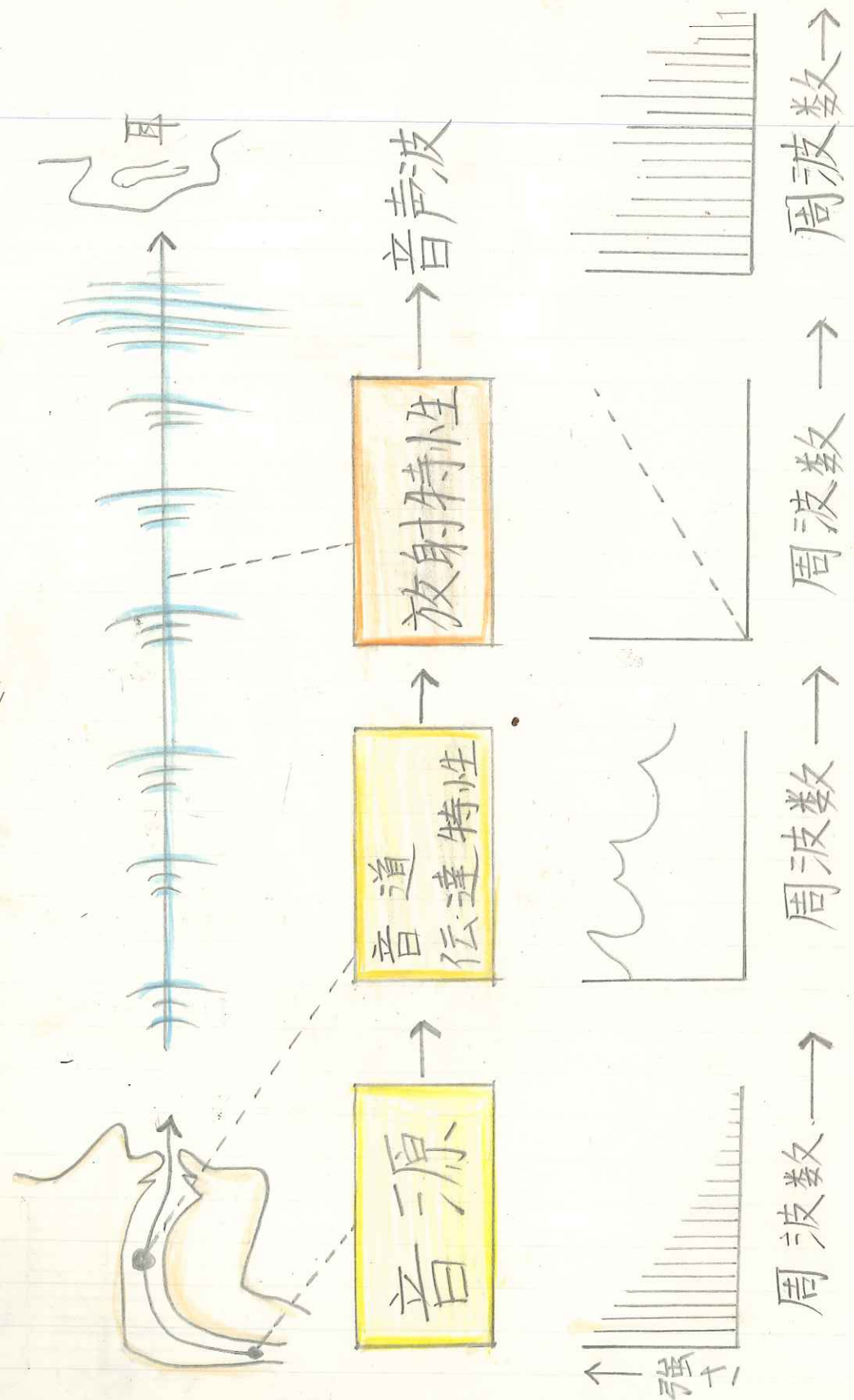
はれつ音 まさつ音

はさつ音、鼻音

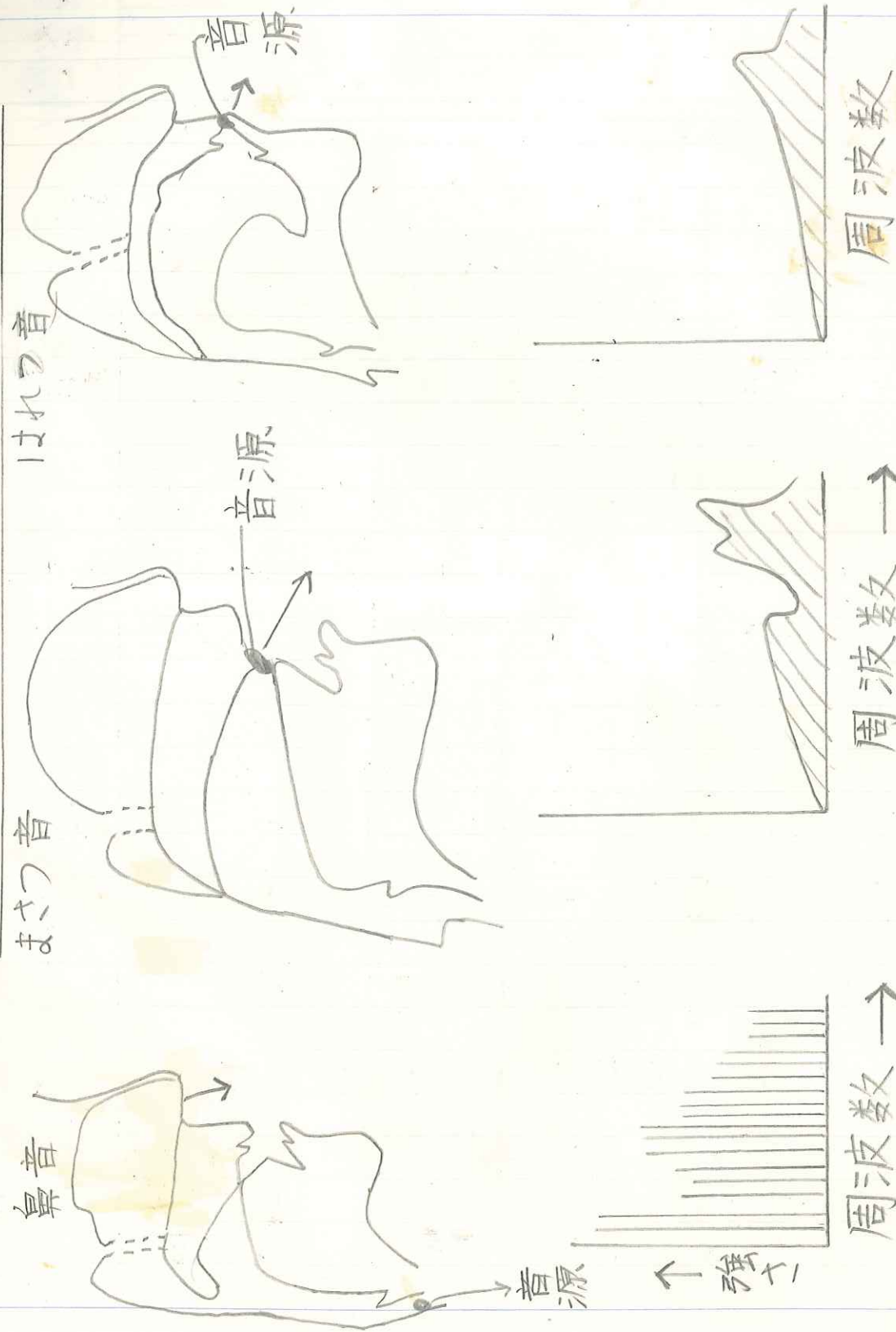
流音、半母音



音波の音ぎょう的性質



いろいろの音に対する音道の形



ことははおたかいの心を通じあうもの
 わたしたち人間は、たったひとり
 で生活しているのではありません。
 ですから、自分の気持ち
 (心)を相手に通いさせるもの
 が必要で、これに「ことば」を
 つかっているのです。「ことば」
 は人間と、おしか、いつでも、ど
 こでもおたかいに心を通じあ
 うもの(記号)です。
 わたしたちが、毎日つかっている
 「ことば」には、まず、聞いたり
 話したりすることはあります。
 これを「話しことば」とい
 います。また、読んだり、書い

たりする「ことは」もあります。
これを「書きことは」といいます。
ですから、「ことは」には、
「話しことは」と「書きことは」の
2種類があり、わたしたちはこ
れらをつかって、おたかひに通
じあっているわけです。



話しことはと書きことはのとくちょう

	話しことは	書きことは
便 利 な 点	1. かんたんでおぼえ やすく使いやすいこ と 2. 細かい点までは、き りと相手に伝えられ ること	1. 話しことはの欠点 がなくなること 2. 新しい知識や技術 の方法などを印刷物 (新聞・雑誌・書物など) によって知ることか てきること
不 便 な 点	1. 聞いたり、話したりした あと、すぐ消えてしま うのこらないこと。 2. 大切なことを聞きの かしたり、話しあわれ たりすること 3. 後々の世まで伝え ることかたできない こと 4. ...	1. 文字の読み・書きを おぼえなければなら ないこと 2. とくに書くことに時 間がかかること

	話しことは	書きことは
不便な点	4. 遠いところにはな れている人たちに は、そのままでは 伝えることがで きないこと	

調査 3

現代かなづかいのきまり

ことはを「かな」で書きあらわすとき
のきまりを「かなづかい」といいます。
いま、ふつうつかわれている
かなづかいを現代かなづかい
といい、昭和21年に国で決めた
ものです。

現代かなづかいの原則は、標準
語の発音とありに現代の
「かな」で書きあらわすことです。

しかしいくつかの例外がありま
す。すなわち、ことはによって
は、いっさいの発音とちかう音
をあらわす文字をつかう場合

かあるからです。

現代かなづかいがつかわれる

前のかなづかいを「旧かなづか

い」または「歴史かなづかい」と

いいます。現代かなづかいは旧

かなづかいをもとにして生まれ

ましたか、発音と「あり」にす

ることを原則とした点か大き

なちかいです。

1. 「イ」「ウ」「エ」「オ」の発音は「^イ

「う」「え」「お」と書こう

「^オ」と読んで「^え」を書く

場合もある

2. 「^エ」と読んで「^へ」と書く

場合もある

2. 「シ」「ス」の発音は「し」「す」と
書こう

。「シ」と読んで「ぢ」と書く場合
もある

。「ス」と読んで「つ」と書く場合
もある

3. 「ワ」の音は「わ」と書こう

。「ワ」と読んで「は」と書く場
合もある

4. 「カ」「ガ」の発音は「か」「が」と書こう

5. 長くのは「ず」音(長音)のかなづかい

①「ユー」の音は「ゆう」と書こう

。「ユー」と読んで「う」と書
く場合もある。

②「エー」の音は「ええ」と書こう

③ 「ネー」音は「ねえ」と書こう

④ オの列の長音

「オー」→「おう」

「オー」と読んで「おお」と
書く場合もある

「コー」→「こう」

「コー」と読んで「こお」と
書く場合もある

「ゴー」→「ごう」

「ソー」→「そう」

「ゾー」→「ぞう」

「トー」→「とう」

「トー」と読んで「とあ」と
書く場合もある

「ドー」→「どう」

「ノー」→「のう」

「ホー」→「ほう」

「ホー」→「ほう」

「ポー」→「ぽう」

「モー」→「もう」

「ヨー」→「よう」

「ロー」→「ろう」

④ 「キュー」→「きゅう」

「キョー」→「きょう」

「シュー」→「しゅう」

「ジュー」→「じゅう」

「チュー」→「ちゅう」

「ニョー」→「にゅう」

「ヒュー」→「ひゅう」

「リュー」→「りゅう」

⑤ 「キョー」 → 「きょう」

「キョー」 → 「きょう」

「ショー」 → 「しょう」

「ショー」 → 「じょう」

「チョー」 → 「ちょう」

「ニョー」 → 「にょう」

「ヒョー」 → 「ひょう」

「ヒョー」 → 「ひょう」

「ヒョー」 → 「ひょう」

「ミョー」 → 「みょう」

「リョー」 → 「りょう」

⑥ つま、た音(そく音)や「キャ」「シ

ョ」「ヒョ」などの音(よう音)

は右下に小さく書こう

調査 4

日本の方言について調べてみた。

日本の東と西の口とはのちがい

方言区画の東部と西部

現代の日本を口語を中心にして見ていくと、どうしても東西の2つに区分される。これを本州東部方言と、本州西部、内部または、中部地方と近き地方との境に求められる。たとえば、「シナケレバ」と「セネバ」「行かない」と「行かん」「シナイ」と「セニ」「雨だ」と「雨ジャ」「雨ヤ」「受けろ」と「受けヨ」というような2つの対立した表現の境界線は

長野県の西境を通るという
点である。また、「ひろった」
と「はろオタ」「買った」「買った」
との対立は、新かた県が
富山県、石川県、福井県の南境
ときふ県の北西の県境を
まわって伊勢わんに入っ
ている。

日本方言区画図



調査 5

日本の方言のことがだいたいわかった。
 ので、今度は東北の方言について
 調べてみた。

目 東北の方言

東北方言を大きく分けると、
 北奥羽方言と、南奥羽方言に
 なり、その境界は、図1のよ
 うに岩手県を南北に分け、
 山形県を庄内と内陸とに分
 けている。このような東北
 方言内部の小区画は、図2
 の旧藩時代の領或図(幕
 末)とつき合わせると、お
 どろくほどハッチが見ら

れる。この現象は関東
 や近畿にくらべて、東北
 地方の大きな特長であ
 るという。この原因の
 第一は、徳川時代に二
 百数十年間、東北地
 方において各藩の領地
 にほとんど変動がなく、
 安定した閉鎖的な土地
 支配が保たれたこと。
 第二は、い藩置県後も東
 北地方は後進地帯であ
 って、昔の藩単位の地
 域性を突き破る近代的
 な交流が他地方より少

なかったことなどがあげ
られている。

現代でも、この旧藩領
域は、言語にあとをとど
めているだけでなく住民
の対立意識、郷土意識
として生きているよう
である。

図 I

東北方言の区画



図2

幕末各藩領域図

木戸沢藩

へ酒井藩

ト上杉藩

 小藩・天領等
混在 地
イ〜ニ・ク〜ル
省 略

調査6

山形県は、庄内方言(北奥羽方言)と内陸方言(南奥羽方言)とが大きく対立し、最上地方、村山地方、置賜地方がそれぞれ内陸方言の内部において対立している。

庄内方言…村山方言の対立状態
方言区画 (アクセント)

庄内、最上地方を中心に分布する北奥羽式アクセントと内陸地方を中心に分布する一型アクセントとに大別され、その境界にあたる

北村山郡や最上町には、
境界アクセントが分布して
いる。また新潟県に
接するねずが関と小国
町には、三陸式アクセント
が行なわれている。

図3

語法の区画



小国町は、語方とアクセント
などの点で庄內的であ
り。最上町は、アクセントの
点で北村山と一致が
見られる。

内陸方言では「べ」を
用いて「咲くべ」「立つべ」
となる。

「ない」や「せる」「させる」

「れる」「られる」が

「ラ シエル」をつけて、「試

験を受けラ シエル」「よけラ

シエル」「腰をかけラ シエル」

の言い方をする。

なお、「着さシエル」「見さシエル」
の言い方より「着シエル」「見
シエル」を用いる事が多い。

村山方言では、「ます」の
言い方は少なく、「ス」を
つけて「着ルッス」「受けルッス」
の言い方をする。

置賜方言では、「ス」の
代わりに「シ」がつく。
時がつく時に「ル」が

ぬけて「着ッドキ」「受けッ
ドキ」「^来ッドキ」「来ッドキ」
「刈ッドキ」「有ッドキ」の
ように「ル」が「ツ」に
なる。

また、「レ」を「ラ」にな
って「有ラバ貸シテケレ」
「出来ラバ止めてもらいたい」
のような言い方も行なわ
れる。

もっと多くの場合「ゴン
タラ」「ゴッタラ」「ゴンバ」
という言い方もあり。
また「ト」を「ド」を
つけて「泣グトタダグゾ」

「雨が降ルど中止ダ」の
ような言い方で表現す
る。

尊敬命令法とも言うべき
「セラレヨ」の意味の
方言は、「シャエ」で
あって「書ガシャエ」「見
ラッシャエ」「投ゲラッシャエ」
「スラッシャエ」のよう「ラッ
シャエ」をつける。

サ変は、「スラッシャエ」の外
に「クッシャエ」も用いる。

「せさるべからず」の口語
は「(シ)なければならぬ」

とか、「(セ)ニャナラヌ」とか、
「(セ)ンナラン」などの言い方
があるが、村山地方では、
「書カンネ」「見ランネ」
「受ゲランネ」「売ランナネ」
「生キランナネ」「勉強スランナネ」
のように「ンナネ」の他
に「ランナネ」をつける。

カ変、サ変には「ユンナネ」
「コランナネ」「ケンナネ」「スラ
ンナネ」の二つの言い方
がある。

東置賜地方では、「シンナネ」
「しなければならぬ」

「ミンナネ」「見なければなら
ない」の用法がある。

米沢では「シナエナンナエ」

「しなければならぬ」

「エガナエナンナエ」「行か
なければならぬ」の言
い方をする。

この意味の「ナネ」のほ

か、「書ガンタテ」「書かな
くても(いいよ)」「見ランタテ」

「見なくても(わかんべ)」

「負ゲンタテ」「負けなくても(いいよ)」

「来ランタテ」「来なくても(かまわない)」

「為_すランタテ」「しなくても(いいよ)」

ともなり、また「見ンタテ」

「負ゲンタテ」「来ンタテ」

「スンタテ」のような略した
言い方もする。

「有る」「来る」「為_する」

「出来る」「受ける」のよう
なものは、「アルベ」「クルベ」

「スルベ」のような言い方の
ほかに「ル」をとって

「有ンベ」「来ンベ」「スンベ」

「出来ンベ」「受ゲンベ」と

いうことが多い。

方言独特の語法に

「ホダエ エギダエゴンタラ、エッテクンダ」

「そんなに行きたいなら行ってきたら

どうだ、行ってこいよ」

「タメス = 試験ウケテミダ」

「試みに = 試験をうけてみた
うどう？」

「見ダ」「すダ」「来ダ」

のように二種の言い方で

「見ルダ」「スルダ」「来ルダ」

のいい方をする。

「あまり人の悪口をヤネダ」

「言わないうようにしなさい」

「 スネダナ」「するん
じゃないぞ」となり「書い

てある」を「書カッテル」。

「戸が^カ開いていた」を「アカッ
テタ」という。

「勝たれない」を「勝ツンナエ」

紙を「ヤぶく」を「フタフ

バク」。「かぶれる」を

「カブケル」「歩む」を「アエ

ブ」となる。

また、「^煮にえる」も「寝^寝る」

も同じになる。

「行く」が「ユク」「エグ」

「エング」となり「ング」と

もなる。

「そうだ」を「ンダ」「いやだ」

を「ヤンダ」となる。

語	言の形 オ終止形	否定	過去	假定	命令
言う	ユー	いわない コタ	いった ユタ	いえー ユエハ	いえー
食う	クー	くわない カネ	くった クタ	けえ ケハ	ケー
見える	メル	みえない メネ	みえた メダ	メル メレバ	—
煮える	ネル	にえない ネネ	にえた ネダ	ネレ ネレバ	ネロ
消える	ケル	きえない ケネ	きえた ケダ	ケレ ケレバ	ケロ
呉れる く	ケル	くれない ケネ	くれた ケダ	ケレ ケレバ	ケロ

地方別 言葉	村山地	置賜	最上	庄内
恥ずかしい	ハツカスエ	ショーシイ ショースイ	サダクナイ	カフエ
まぶしい	マツポイ マブスエ	マツホイ	マツホイ	カホスエ
うやまい	ネタミイ ショネミタエ	ケナリイ	ケナリイ	ケナリイ
捨てる	ナケル ブンナケル	ブンナケル	ナケル	ウダル
おどろいた	タマゲタ	オホドタ	トデシタ	ビツラシタ
しかる	ゴシャク		ゴシャク	ゴゲル
フらら	ホンダラ	カナコリ	スガ シガ	スガ タリコ
しなけれは ならぬ	サンナネ スランナネ	スンナネ シンナネ	スネンナイ シナンナイ	サラバネ シネバネ
とんぼ	トンボ アケ	ヤンマ	アケ	トンボ

山形県の各地方の方言

おたまじゃくし

庄内地方

がいろくた

最上地方

がえろくた
がいろくと
がえろごと

村山地方

がいろくた	がえろくと
がいろご	がえろご
がいろんご	がえろんご
がえろくた	がえろご
がえろく	おたまじゃくし
がえろく玉	

置賜地方

がいろくた
がいろご
がいろくた
がいろくたま
がえろくたま
がえろご

山形県の各地方の方言

かくれんぼ

庄内地方

かくれぼち

最上地方

かくれぼち

村山地方

かくれかご
かくれかんこ
かくれかんぼ
かくれんぼ

置賜地方

かくれかご
かくれぼち

山形県各地方別のおもな方言 置賜地方

方言	標準語	そのほか 使っている地方
いびつ	強情	- 村山
いかった	よかった	- "
いきやかれ	行ってしまえ	- 最上
いきで	行きたい	- 庄内
いこく	動く	
あんめ	あるまい	庄内 最上
いきんなり	勢いよく	村山
あんした	ごさいました	"

庄内地方

方言

標準語

そのほか
使っている地方

あがらしゃえ

おあがりなさい

- 村山

あがはえ

〃

- 置賜

あははえ

〃

- 〃

あぎねえ

あきぬ

- 村山

あにさ

そにに

ああたは

あれなら

あだは

あれならは

あっけ

ありました

村山
最上

あっけえが

あったか

あっちえ

ありましたよ

あべ

行きましよう

- 全部

あんべえ

行こう

- 〃

いぎで

行きたい

方言	標準語
いぐはげ	行きますから
いねえ	いない
いらね	いらな
いろばや	いりませんよ
いろめせ	いらな
うめぐね	うま
ええかし	よい
えかて	よろしい
えかね	行かなくとも
えげすかね	きにく
えきでえ	行きたい
えげすかね	きにく
えたにせえ	行きました
えや	よい

そのほか
使っている地方

最上
村山
置賜

全部

置賜

置賜

最上
置賜

最上
村山
置賜

最上地方

方言	標準語	そのほか つかっている地方
あえれすぐね	愛らしくない	
あぎひ	あられ	
"	あけひ	全部
あげえだ	あんな	
あか	あるか	全部
あけ	ありました	庄内 村山
あたこえ	あたかい	庄内
あにや	兄	庄内 置賜

調査6をして感じたこと

・山形県の内でも、同じことばでもいろいろな言いかたがあるのとわかって、おもしろいと思った。

・ひとつの意味のことばでも、私がぜんぜん意味のわからない方言もあるし、また、私たちが日常つかっている方言とにた地方の方言もある。

この研究をしての反省と自分の考え

私は、ことばというものを、ことばの起こりから始めて研究してみた。方言のことについては、山形県内だけのことを調べた。このあと、日本国内のそれぞれの県の全部の方言をしらべて見たいと思う。それは、とてもたいへんだけれど、もとひょうにおもしろいことだと思う。そして、なぜ日本の国の中でも、いろいろな方言がそんなにたくさんあるのか、また、標準語からみた場合、世

んせん意味の通しない方言
などは、どういうふうにして生
まれたのか、ふしぎでもある。
それに、それではことばが通
じなくでこまる場合もあると
思う。

ことばは、その人の気持ち
をあらわすのに大事なもの
であるから、相手に正しく通
じるようにしなければならな
いものだと思う。

この研究をして気づいたこと
日本の国の大昔にも、東と西
にはちがった文化があった
ことがわかったが、それと
いっしょにことばも東と西
とにわかれ、また、それぞ
れ各地方にもことばのち
がいができてきたのだろ
うと思う。